図書ニュース

大阪府立北野高等学校図書館

第３号

2013. 7.6 発行

『もし最高の休日をお求めなら、

当図書館ではその準備ができています。』

楽しい楽しい夏休み♪といっても、勉強に明け暮れる日々を過ごす人もいれば、部活でひと夏を駆け抜ける人もいるでしょう。

私が高校時代、図書館を訪れた日数はわずか数日。本を借りた記憶は一切なし。お恥ずかしながら、今まで本を読み漁ったという経験は私の歴史には存在しません。

しかし、今になって、毎日通っている学校に無料で本が借りられる場所が存在することのありがたみを感じます。利用するもしないもあなた次第です。

「数ある娯楽の中から、読書を選んだみなさま、おめでとうございます。」

今回紹介する本たちは、私の好きな科目に関するものや、最近図書館に入ってきたものです。興味が湧いたらとりあえず図書館へ GO！

本の後にある【　】内の記号は図書館での請求番号です。

①小沢征爾『ボクの音楽武者修行』(新潮社)【760/013/1】

まずは、私の教科である音楽に関する本を一冊紹介します。近年体調を崩されていますが、日本人として初めてウィーン・フィルのニューイヤー・コンサートの指揮をし、ウィーン国立歌劇場の音楽監督に就任するなど、長年の間、世界的な名指揮者として活躍されている小沢征爾さんが著者です。クラシックの指揮者というと堅苦しいイメージがあるかもしれませんが、小沢さんが自身の青年時代を語ったこのエッセイを読むと、そのような考えは覆されるかもしれません。何といっても、24 歳の時に「西洋音楽の生まれた所を知りたい」という理由だけで、言葉もわからないまま一人で貨物船に乗って、日本から持ってきたスクーターでヨーロッパを旅する若者の話なのですから。思い切りがいいのか、無鉄砲なのか、何ともいきあたりばったりな感じですが、旅の途中で指揮者の国際コンクールで一位になり、名指揮者であるカラヤン、バーンスタインらに認められ、ニューヨーク・フィルの副指揮者になるあたり、さすがです。この本を読んで強く思うことは、夢を持ち、それに向かって邁進する若者の「強さ」です。失敗するかもしれないということは考えな

いで、とりあえずやれることをやってみる、ということの大切さをこの本は教えてくれます。音楽が好きな人以外にもお勧めの一冊です。

②福岡伸一『生物と無生物のあいだ』(講談社)【460/F3/1】

高校時代、将来は生物の教師になろうと思っていたほど生物は好きな科目で得意でした。とはいえ大学以降、生物を勉強することもなく、数年前にふと話題になっていたこの本をたまたま手にしたのですが、生物学者である著者が自身の回想を交えながら、「生命」という大きなテーマに迫る姿にとても興奮して読むことができました。皆さんは生物と無生物の区別がつきますか？「そんなの当たり前じゃないか。人は生物で、車は無生物だ」などと、思わず聞こえてきそうですが、この問題はつきつめると、なかなかの難しさを抱えていることがわかります。著者が例に挙げるのはウィルスです。ウィルスが生物か否か、というのは生物学者のあいだでも意見が分かれる問題なのです。そして、その困難さは生物の定義の問題に関わってきます。著者はウィルスの他にもＤＮＡやミトコンドリアなど、様々なものについて語りながら、また一方で様々な学者たちの研究史上のドラマにも触れています。生物の授業で必ず出てくる、ワトソン、クリック。彼らはＤＮＡ２重らせん構造に関する研究でノーベル賞を受賞しましたが、それに至るまでの人間模様が面白い。エントロピーと秩序が織りなす生物の世界。あなたも、この本を読んで「生命」について想いを馳せてみませんか？

③ケリー・マクゴニガル『スタンフォードの自分を変える教室』(大和書房)【159/M14/1】

アメリカの名門大学であるスタンフォード大学で、受講者の 97%に影響を与えたという、超人気講義の邦訳です。「今の自分に全て満足がいっていて、自分はもう何も変わる必要がない！」という人は少ないと思います。やらなくちゃいけないことがあるのに、ついつい誘惑に負けてゲームをしてしまう、目標を立ててもすぐに挫折してしまう、そんな自分が嫌になる…なんて経験はありませんか？本書では著者が心理学、神経科学、経済学などの最新の学問の成果を織り込んで、「一度きりの人生が最高の人生に変わる」講義を行っています。人が「誘惑に負ける」瞬間を科学的に分析しながら、どうしたらその誘惑に耐えて、自らを望む自分に変えていくのか、著者は「脳は１つでも自分は２人いる」、「呼吸を遅らせれば自制心を発揮できる」、「やる力とドーパミンを結びつける」など印象的な表現を用いながら、わかりやすく説明してくれています。「変わりたくても変われない」と思っているあなたが、今までの自分とは違う自分になれるきっかけになるかもしれませんよ。

④ジャレド・ダイアモンド『昨日までの世界　上・下』(日本経済新聞出版社)【389/D2/1-1～2】

今日の欧米優位の世界が形成された要因を探り、世界的ベストセラーとなった『銃・病原菌・鉄』の著者の新作です。著者は言います。600 万年におよぶ人類の進化の歴史のな

かで、国家が成立し、文字が出現したのはわずか5400年前のことであり、狩猟採集社会が農耕社会に移行したのもわずか1万1000年前のことである。人類の歴史全体の中では、今日の私たちの社会(つまり、「今日の世界」)はほんの一瞬に過ぎない。では、それ以前の社会、つまり「昨日までの世界」の人類は何をしてきたのだろうか、と。著者はこの「昨日までの世界」を知るヒントをニューギニア、アフリカ、南米に散在する「伝統的社会」の中に見いだします。そして、狩猟や採集を営み、毎日を過ごしている伝統的社会の考え方を、もめ事の解決、子育て、高齢者の扱いなど様々な点から論じ、それが我々の社会といかに異なっているかを明らかにしようとします。たとえば、子育てでは、アフリカのアカ・ピグミー族は子どもを絶対に叩きません。ニューギニアのある部族に至っては、赤ん坊がナイフを振り回しても叱ることさえしないといいます。「しつけ」という概念がないかのように見えるほどの放任主義の中で、彼らは子どもが自律的に学んでいくことを重視します。このような社会は私たちの社会とは多くの点で異なっていると言えますが、著者はこうした伝統的社会の暮らしの中に、今日の私たちがよりよく生きていくためのヒントが隠れているかもしれないと言います。私もその通りだと思います。自分たちとは異なる社会を知ることで、より視野が広くなるという意味で、皆さんに是非読んでもらいたいと思います。

⑤上田正昭『私の日本古代史　上・下』(新潮社)【210/U4/7-1～2】

生物と並んで私の得意教科だったのは日本史です。なかでも、日本の古代史には独特の魅力があると思います。本書は日本古代史研究の碩学である著者が、縄文時代から律令国家成立までを通して論じた、総決算的な歴史書です。難しい部分も多く、読むのは大変かもしれませんが、それだけの価値はあると思います。著者の議論の特徴は、日本古代史をアジア、特に中国、朝鮮とのかかわりのなかで見つめていること、もう一つは天皇制の成立を律令国家成立の問題として把握していることです。中国という大国を中心に東アジアの国々から影響を受けながら、一方でそうした影響からの自立を保ち、独自の国家建設を試みた古代の日本の姿が述べられています。そうした歴史は現代の日本と重なっている点もあり、私たちが古代史から学ぶことはまだまだ多いと言えそうです。

⑥山藤章二『ヘタウマ文化論』(岩波書店)【361/Y13/1】

音楽の世界にも「ヘタウマ」という言葉があります。テクニック的に巧いわけではない、どちらかというと下手なんだけれども、何故か味のある演奏をする人に向けられる褒め言葉です。最近の日本文化について考えた著者は、ゆるキャラやCMの寒いダジャレなど、「ヘタなもの、ゆるいものが、いまもてはやされ過ぎていると思った」と言います。そして、その風潮を嘆いた著者が、日本の文化を遡ってみると、江戸時代の庶民文化から立川談志まで、そこには脈々とヘタウマが息づいていたことを発見するのです。この本では「ヘタウマ」をキーワードに、著者が出会った様々な人々(岡本太郎、タモリ、東海林さだお、糸井重里…)の面白くも興味深いエピソードの数々が披露されます。気がつくと、日本の文化

は「ヘタウマ」で読み解くとわかるのかもしれないと思ってしまいます。世の中巧さだけを目指さなくても良いのだと励ましが得られる本です。ただ、ピカソを例にとってみても、彼は天才的な画力、巧さを持ち合わせながら、そこから独特の世界観を築いていったことを忘れてはいけませんが。

⑦谷川俊太郎『自選　谷川俊太郎詩集』(岩波書店)【081/I1-7/192-1】

「詩なんてほとんど読まないけど、この詩人だけは聞いたことがある」という人も多いのではないでしょうか？国語の授業でその詩の魅力に触れた人も多いかもしれません。この本は、詩人が自らの膨大な数の詩の中から173編を選んで収録したものです。この人の魅力は何よりも、言葉を選ぶ時の「自由さ」にあると私は思います。たとえば、「おならうた」という詩。

いもくって　ぶ　　　くりくって　ぼ
すかして　へ　　　ごめんよ　ば
おふろで　ぼ　　　こっそり　す
あわてて　ぷ　　　ふたりで　ぴょ

思わず吹き出してしまうような、可笑しさに満ちあふれていないでしょうか？ おならについて、あれこれ考えてしまったり、「最後のぴょって何だ？」とか思ったりしてしまう人は、もう詩人の魔法にかかっています。他にも素晴らしい詩がたくさんおさめられているので、興味を持った人は是非他の詩にも触れてみて下さい。

⑧有川浩『レインツリーの国』(新潮社)【913/A34/16】

『図書館戦争』や『阪急電車』、『県庁おもてなし課』など、話題作を次々と発表する人気作家の書いた、切ないラブストーリーです。主人公の向坂伸行は大学を卒業し、関西から上京して企業に入社して３年目の会社員。彼は昔読んだ「フェアリーゲーム」という本のラストについて、皆がどう解釈しているかをパソコンで検索します。その中で、自分と同じ感性をもつ、「レインツリーの国」というブログを開いている「ひとみ」という女の子と知り合います。お互いにメール交換をし、二人は次第に意気投合します。そして、実際に会ってみようと伸行は申し出るのですが、彼女は頑なに拒否します。実は彼女は…、という感じのお話です。これ以上はネタバレになるので書きませんが、単なる恋愛小説というわけではなく、色々と深く考えさせられる小説です。この人は様々な小説を書いていますが、どの小説も弱者に対して共感を持って寄り添うように書かれているところに好感が持てます。他の本でこの著者を知った人は是非読んでみて下さい